

10. 談話の聞き取りと予備能力 — 日本語母語話者と上級日本語学習者について —

西馬薫
大阪外国語大学大学院

Abstract:

Expectancy Competence of Native Speakers and Learners in Listening Comprehension in Discourse

This study investigates the expectancy competence in discourse with native Japanese speakers and advanced level learners of Japanese. The result is following. Both of Native speakers and learners' expectancy in listening of discourse have 2 different stages, (1) They expect certain information to follow based on foregoing information. (2) They expect development of discourse. Further (2)-1 In the beginning part of context they expect the direction of context to be related to the key word (i.e. new vocabulary). (2)-2 In the development part of context they expect the direction of context as a hint of 'arrangement in paragraph' and 'connection between paragraph and paragraph'. Furthermore within the limits of this study Chinese learners are poor at expectancy and comprehension in text which has the conclusion located in the end, but are good at them in text which has the conclusions located in the beginning and in the end. Korean learners are good at expectancy and comprehension in both texts.

1. はじめに

聴解能力を支えるものとして、音声知識、語彙知識、文法知識、背景知識、繰り返し、フィラー等の聴解に関するストラテジーなどがあげられるが、上級レベルの日本語学習者の中にはそれらの知識を有しながらも、聴解を苦手とする学習者もいれば、順調に伸びを見せる学習者もいる。その違いはどこにあるのだろうか。ACTFL Proficiency Guide linesでは、初級レベルは単音、単語の聞き取りができる段階、中級レベルは文レベルの短い会話の聞き取りができる段階、上級レベルは談話レベルの話（インタビュー、ニュース、短い講義等）の聞き取りができる段階とされている。すなわち初中級レベルが与えられた情報を正しく聞き取るに留まる段階であるのに対し、上級レベルはテキストの前後関係、つまりテキストの結束性に気づきながら談話を聞き取る段階とされているのである。

日本語学習者の聴解能力を向上させるためには、話し言葉の特徴を知り、それをもとに聴解のストラテジーについて学ぶことも大切だが、さらにテキストの内容から後続部分を予測する力をつけることが重要である。本研究では、上級レベルでの聴解能力の差は、テキストの結束性に気づき既出の情報を手掛かりに後続の情報を予測する、予測能力の差に起因するのではないかと考え、まず日本語母語話者（以下母語話者とする）を対象にデータを収集し、分析、考察を行った。そしてさらにこの母語話者のデータをもとに上級日本語学習者（以下、学習者とする）に同様の調査を行い、母語話者との予測パターンの比較を試みた。

2. 先行研究

予測能力に関する先行研究には、すでいくつかの研究報告がなされている。まず文法的知識に関する研究では、寺村（1987）は母語話者を対象に、ある程度の長さの文を文節ごとに区切ったものを順に提示し、後続文を書いてもらうという調査を行っている。その結果、母語話者は形容詞文、名詞文等の種類やテンスなどを予測したり、「名詞＋助詞」「名詞＋助詞」という連りから一定の動詞を予測することが指摘されており、「母語話者は驚くほどの正確さで先を予測している」と述べている。又、大野他（1996）は母語話者と学習者を対象に、後続文完成課題を実施し、助詞「が」「の」「に」がどのような予測を引き起こすのか、又、言語外の情報が予測にどのように影響するかを中心に調査を行っている。その結果、

母語話者でも「名詞十の」を主語として捉える予測はされにくいこと、「名詞十に」の後は学習者、母語話者とも一定の動詞を予測すること、又母語話者の予測には言語外情報が影響を与えることなどが指摘されている。

次に談話レベルでの予測能力に関する研究であるが、平田（1991）は母語話者と学習者を対象に、ニュース文の構造と聴解の予測能力について主語、文節数、文末などを課題に調査を行っている。その結果、母語話者、学習者ともに「ハ、デハ」が主語にくる場合や文節数が多い長文でも、陳述の流れを予測させる連用節があれば、予測率が高くなることが指摘されている。しかし、正予測率は母語話者が62.98%、学習者が23.51%とかなり開きがみられると報告されている。その他、ニュース文の展開と予測に関する研究として西条・渡邊（1997）は母語話者を対象にニュースにおける予測方略についての調査を行っている。調査にはオリジナルのニュースとパラグラフの順番を入れ替えたニュースを用い、パラグラフごとによどのような内容が話されるか予測内容を自由記述させる方法で行っている。その結果、原文との一致率はオリジナルのニュースを使用したグループでは74.7%と高いが、順番を入れ替えたグループでは34.5%とかなり低くなっており、前者のような高い予測を可能にさせているのは、ニュース展開の配列に関するスキーマが聞き手に内在し、聞き手がそのスキーマを使っているためであることが指摘されている。

3. 調査

3.1. 目的

上級レベルの学習者に求められる聴解のテキストを考えた場合、助詞、文節といった文レベルの予測だけでは充分とは言えない。そこで平田、西条、渡邊の行ったような談話レベルでの予測能力に関する研究が必要とされるわけであるが、本稿ではそれらをもとにさらに尾括式、両括式の構造を持つ談話について母語話者及び、学習者がどのように流れを予測し、理解しているのかを探るため、以下のような調査を行った。

3.2. 調査方法

3.2.1. 手順

方法は母語話者、学習者それぞれ以下の通りである。

(A) 母語話者

(1) 予測能力に関する調査

インタビュー形式で行う。一度練習を行った後、被験者にテープを聞いてもらいながら後読文、結論等が予測できたところでテープを止め、その内容について話してもらったことを録音する。但しテープを通して聞いたテキストからの予測能力を測るため、タイトルは聞かせない。

(B) 学習者

(1) 予測能力に関する調査

インタビュー形式で行う。一度練習を行った後、被験者にテープを聞いてもらいながら、日本語母語話者が予測を行ったと回答した①-⑦¹でテープを止め、後読文、結論等を予測してもらおう。但しテープを通して聞いたテキストからの予測能力を測るため、タイトルは聞かせない。

(2) テキスト理解力に関する調査

予測能力を測った後、内容が理解できているかどうかを調べるため、それぞれのテキストの結論を口頭で述べてもらう。

(3) 語彙知識・文章構造知識に関する調査

フォローアップインタビューにより、未習語彙の確認及び文章構造についての学習経験の有無を確認する。

3.2.2. 使用材料

使用材料は、中上級レベルの学習者を対象に作成された聴解材料であること、又談話レベルでのテキストの結束性を考える際、焦点が絞りがやすいことから、『ラジオ番組「朝日新聞の声」を聞く』（くろしお出版）「第2課 人間が大切な機械化社会」と「第10課 現代文明への危険信号」を使用した²。使用材料は資料として別途添付する。（資料1）又、テキストの構成については表1に示した通りである。

<表1 テキストの構成と内容>

人間が大切な機械化社会		現代文明への危険信号	
構成	内容	構成	内容
冒頭部 I	新幹線内での車内放送(1)(2)	冒頭部 I	気候の話(1)(2)
冒頭部II	富士山の様子とし手の感想(3)~(7)		
展開部 I	車内放送に対するマイナス意見(8)	展開部 I	かつての人間と今の人間
II	車内放送に対するプラス意見(9)	II	(自然に対する態度の比較) (4)
III	機械化社会の具体例(10)(11)	III	雪に戸惑う現代人の具体例(5)(6)
IV.	生の声のありがたさ(12)(13)	IV	自然に挑戦する意欲を失った現代人(7)
結論部	生の声の車内放送の良さ(14)(15)	結論部	現代文化への危険信号となる寒さ (結論2) (8)~(10)

() 内の数字は段落³を表す

表1からも分かるように「人間が大切な機械化社会」は文章の主題が終わりの部分（段落(13)~(15)）に提示されていることから、構造類型は「尾括式」だと言える。そして「現代文明への危険信号」では文章の主題が冒頭部に一度提示され、また結論部で繰り返されていることから、構造類型は「両括式」だと言える。

3.3. 被験者

- (A) 母国話者：20代から30代の男女各5名ずつ計10名（職業は会社員、日本語教師、主婦、大学生など）
- (B) 学習者：大学1年生の男女各5名ずつ計10名。国籍は被験者CK,CL,CM,CD,CHが中国、KI,KS,KP,KC, KKが韓国（各5名ずつ）（日本語能力検定試験1級の平均点312/400点）⁴

3.4. 分析方法

母語話者、学習者共に複数回答が得られたものを中心に、それぞれどのような予測が行われているか、又その予測が既出情報とどのようなつながりを見せているかを分析していく。さらに学習者間でも母語に

より予測及び内容理解に差が見られるかどうかを探るため、中国人学習者と韓国人学習者を比較、分析していく。

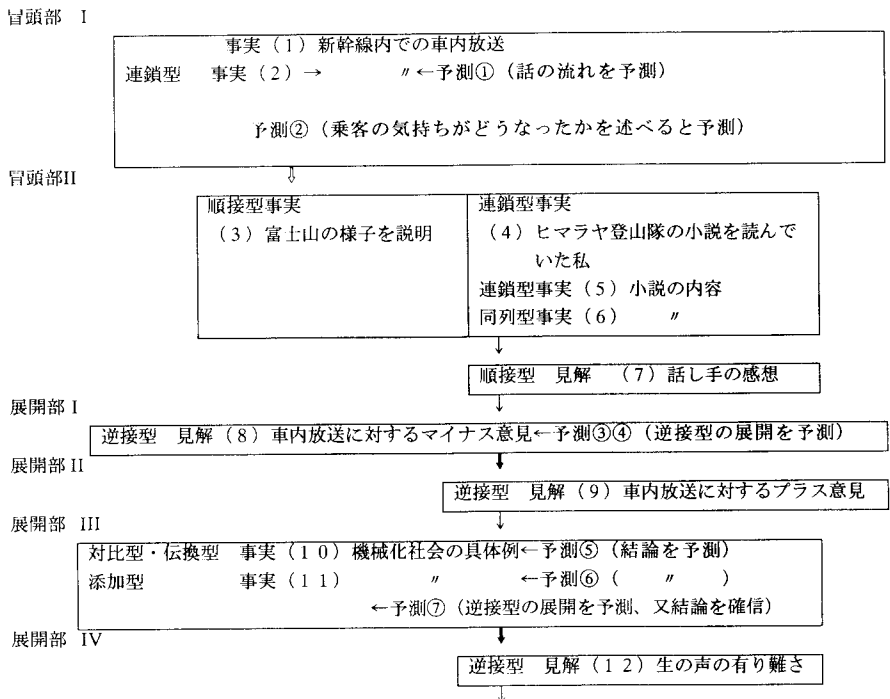
尚、予測の分析には市川(1978)を参照した佐久間(1990)⁵⁾の「接続表現」(5)を、又、段落の配列⁶⁾の分析には市川(1978)を援用する。ただし、実験に用いたテキストは書き言葉の特性⁷⁾を有したものとはいえ、音声として一度しか聞くことができず、聞いたそばから消えてしまうという点で話し言葉の範疇に入るものと本稿では捉える。

4. 分析結果と考察

4.1. 母国話者の予測結果と考察

母国話者10名を対象に調査を行った結果、「人間が大切な機械化社会」、「現代文明への危険信号」共に複数回答が得られた箇所は7カ所であった。それを図1「母語話者の予測 人間が大切な機械化社会」、図2「母語話者の予測 現代文化への危険信号」として表1のテキストの構成と共に以下に示す。尚、予測の太字は談話の展開に関する予測を、予測の細字は直前の既出情報からの予測を表す。

図1 <母語話者の予測 人間が大切な機械化社会>



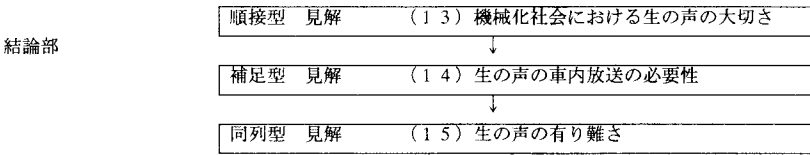
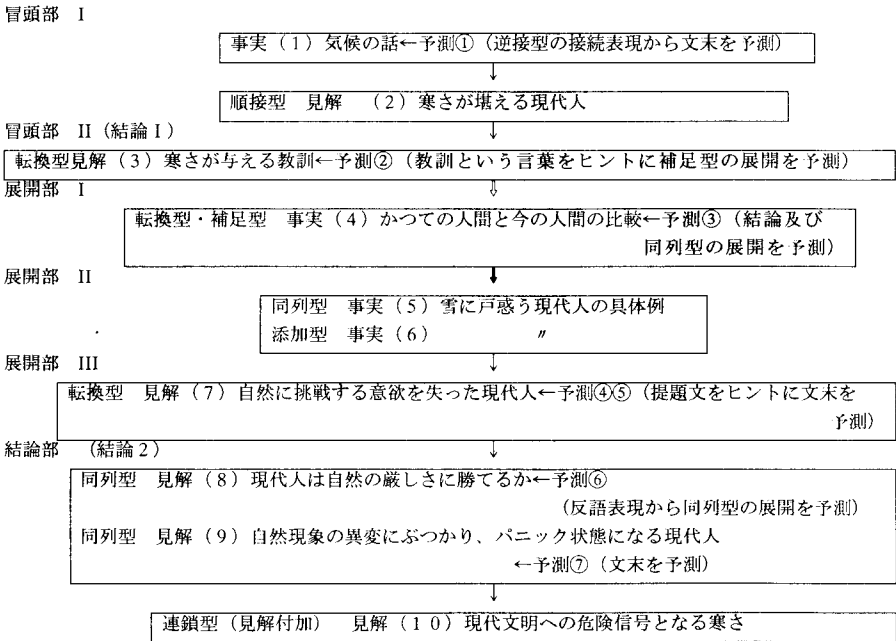


図2 <母語話者の予測 現代文明への危険信号>



以上の分析結果をまとめると次のようになる。母語話者の予測箇所はいずれも7カ所あったが、予測には二つの段階があることがわかる。

(1) 直前の既出情報から、後続する情報を予測する。(細字の部分)

これは①前文の内容から後続文を予測するものと、②文の前半の内容から後続の内容を予測するものとに分かれる。まず①の例として、挙げられるのは「～というのです」「果たして～か」などである。「～というのです」という表現で、聞き手は引用部分が終わったことに気づき、既出情報の内容から次にはその結果が来ると「順接型」の展開を予測している。又、「果たして～か」という表現からは、次には既出情報を言い換えた内容が来ると「同列型」の展開を予測している。そして②の例としては、提題文「～は～だ」や逆接型の接続詞「～のに」など、文型によるものが多く見られる。

(2) 談話の展開に関する予測をする。(太字の部分)

これはテキストの「展開」や「結論」部分に関する予測であり、談話の内容を理解する上で重要な予測となる。図1を見ると、冒頭部の予測①で全体のテーマとなる「車内放送」に着目し、展開部では展開部Ⅰと冒頭部との対比から既出情報とは反対の意見が来る(予測③④)ことを予測している。そしてその流れを踏まえながら展開部Ⅲの途中で結論(予測⑤⑥)を予測するに至っていることがわかる。又、図2を見ると冒頭部Ⅱ(結論Ⅰ)を聞いたところで「教訓」という言葉から冒頭部Ⅰの単なる気候の話とは違った新たな展開がなされる(予測②)と予測している。そして展開部Ⅰの内容から結論(予測③)を予測した時点で「展開に関する予測」は終わり、その後の予測は直前の既出情報から後続する情報の予測に留まり、いわゆる「聞き流し」が行われているのが分かる。これらの「展開に関する予測」は直前の情報を聞き取るだけでは難しく、談話の流れを追っていくことで初めてなされるものであるが、構成部分によってその予測要因には違いが見られる。ではどのように違うのか、それを以下に詳しく説明する。

(2) - 1 冒頭部では「キーワード」を手掛かりに予測する。

冒頭部ではそれぞれ「車内放送」や「教訓」といった「キーワード」を手掛かりに話の方向性を予測している。図2では「教訓」を「キーワード」に「文明人と寒さの関係」や「寒さと生活の関係」というような具体的な内容が予測されている。

(2) - 2 展開部では「段落の配列」及び「段落の接続」を手掛かりに流れを予測する。

まず、図1の「人間が大切な機械化社会」について考察する。予測③④は逆説型の展開を予測したものであるが、その予測要因を段落の配列から考えてみる。予測③④が行われた段落(8)は話し手の「見解」が述べられているが、これは段落(1)-(2)で述べられた「車内放送」という「事実」に対する「見解」であり、「内容の相互関係から見た配列」という点では「対応的關係」にあたる。又前の段落(7)も「事実」に対する「見解」であるが、これは段落(1)から(6)の事実を踏まえた上での「見解」である。

つまり、段落(1)(2)の「事実」が契機となり、その結果目にした「富士山」が段落(3)の「事実」である。次の段落(4)以降では、その時の話し手の「車内での行動」や「小説の内容」が述べられているが、これらが段落(7)における話し手の「見解」を導くものとなっている。このように段落(1)から(7)の配列を「内容の相互関係」から考えると段落(3)から(7)は段落(1)、(2)と対応的關係にあるといえる。そしてこの段落(7)と(8)の接続関係をみると、段落(7)は「車内放送にたいするプラス意見」であり、段落(8)は「車内放送に対するマイナス意見」であるため、この二つの段落は「逆接」関係にあると言える。このように段落の配列及び接続関係が絡み合いながら、次の流れが方向付けられるのだが、段落(8)ではさらに「人によっては～かもしれません」という「文型」が提示されたことから、聞き手には話し手の意図はそれとは違ったものであるという意味が感じられ、「しかし私にとって」という「逆接型」の展開が予測されたと考えられる。又、このことから逆接型の接続表現「しかし」は、文脈の流れから予測可能であると言えよう。

次に、結論を予測している予測⑤⑥について考察する。まず段落の配列であるが、予測⑤が行われた段落(10)、予測⑥が行われた段落(11)ともに「機械装置の具体例」といった「事実」、つまり「機械装置のため便利になった社会」が述べられている。そしてこれらの「事実」は段落(9)とは対置的關係にあり、接続関係は「対比型」と言える。又この段落(9)は先ほどの「車内放送に対するマイナス意見」である段落(8)と対置的關係にあると同時に、段落(1)(2)に対する話し手の見解でもある。そのため、段落(10)との間には「ところで」という接続詞が考えられることから接続関係は「転換型」と考えられることも可能である。このような流れから(10)(11)の「事実」は段落(9)の見解を強めるものとな

り、「機械装置のため便利になった社会にあって、生の声は価値あるものである」という「結論」を聞き手は予測するに至ったと考えられる。

すなわち、「人間が大切な機械化社会」における「談話の展開に関する予測」は、①冒頭部で話の方向性（車内放送について）を予測し、②展開部で冒頭部に提示された事柄に対するマイナス意見が提示されたところで、話し手の主張を感じ取り、逆の展開を予測し、③さらに冒頭部とは反対の立場である「便利な機械化社会」の事実が提示された時点で結論を予測するというような順を追っている。

次の図2の「人間が大切な機械化社会」について考察する。展開部において「展開に関する予測」と言えるものは予測のみであり、この予測は結論に関するものである。では、このように早い段階で結論が予測された要因はなんだろうか。図2と同じく「段落の配列」及び「段落お連接」といった観点から考えてみる。

まず「段落の配列」であるが、段落(1)から段落(4)までは「事実」「見解」「見解」「事実」という並びになっている。これを「内容の相互関係」からみていくと、段落(1)(2)と段落(3)(4)は「対応的關係」にあり、「前置きを述べてから、本題に入る」という形を取っている。又、段落(2)の「見解」が単に段落(1)の「事実」に対するものであるのに対し、段落(3)の「見解」は段落(1)の「事実」に対するものであると同時に、段落(4)の命題ともなっている。つまり段落(3)は段落(1)とは「前置き→本題」の關係に、段落(4)とは「命題←立証」の關係にあると言える。次にこの4つの段落の連接關係をみていく。段落(2)は段落(1)を踏まえた上での見解であり、「だから」という接続詞が考えられることから「順接」の關係にあると言える。

次に段落(3)であるが、段落(2)までで述べていた「寒さ」についてとは違った観点から「寒さ」を見ており、「ところで」という接続詞が考えられることから、「転換」の關係にあると考えられる。同じく段落(4)も「寒さ」についてではあるが、「昔の人間と今の人間との比較」に話が転じたと考えられるため、「転換」の關係にあると考えられる。が、それと同時に段落(4)は段落(3)の見解を導いた根拠であるとも言えるため、「補足」の關係にあると考えることも可能である。このように「段落の配置」及び「段落の接続」から見てみると、段落(3)は連接關係では今までの流れとは違う「転換」であり、配列的には「本題」であり「命題」である。聞き手は、この相互の關係から段落(3)が後に続くテキストの理解に大きな手掛かりとなることに気づき、その後話の展開に注意を払っていくことになる。そして、次に続く段落(4)の「かつての人間と今の人間との（寒さに対する）比較」という内容から、聞き手は段落(4)が段落(3)の「補足」内容であり、「命題」を立証する事例であることに気づき、そこから「結論」を導いたものと考えられる。

すなわち、「現代文明への危険信号」における「談話の展開に関する予測」は①冒頭部で話の方向性（単なる気候の話とは違い、教訓となる寒さについて）を予測し、②展開部で冒頭部後半の「命題」を立証する事例が提示されて時点で「結論」を予測するという順を追っている。

以上のことから、母語話者はテキストの構造類型、「尾括式」（図1）、「両括式」（図2）に沿った形で「談話の展開に関する予測」を行っていると言えよう。

4.2. 学習者の予測結果と考察

次に母語話者を対象に調査をした結果得られた7つの予測箇所（予測①～予測⑦）で、10名の学習者がどのような予測を行っているか、又その予測が内容理解に影響を及ぼすかどうかについて調べた。その結果を母語別に二つのグループに分け、考察していく。

まず、「人間が大切な機械化社会」「現代文明へに危険信号」それぞれについての「口頭での結論」（母語話者、学習者とも予測能力を測った後、内容理解のために行った調査）の結果を以下に示す。尚、下記に付した○は母語話者の結論と同様であることを、△は母語話者の結論とやや違っていることを、×は母語話者の結論と違っていることを表す。

「人間が大切な機械化社会」

(A) 母語話者：結論は「機械化が進めば進むほど、人間らしさ、心の温かさが大切になってくる」というものであり、「機械化の中で大切になってくる人間らしさ」に焦点が当てられている。これをもとに学習者の結論を分類すると次の3つに分けられる。

(B) 学習者：

(1) 「機械化社会に必要な人間性」○ これは「機械化になっている社会には肉声の心がこもった話、つまり人間性が必要だ」という内容のものであり、母語話者の結論と一致する。この結論を述べたのは被験者CK, KI, KS, KP, KKである。

(2) 「一般の放送と比較した生の声の良さ」△ 「放送するときは生放送で人間らしさをきちんと見せた方が親しく感じていい」という内容のものであるが、(1)の内容が機械化社会という視点から論じた総論であるのに対し、これは一般の放送と生の声の放送というテキスト内の話し手の体験談をまとめた各論に過ぎない。

この結論を述べたのは被験者CH, KCである。

(3) 「乗客の関心を引く生の声」× 「放送がないよりある方がいい。そして放送の声は生の声の方がいい。それはテープの放送には皆、注意しないけれど、人間の生の声なら注意するから」という内容であるが、これも(2)と同様にテキスト内の話し手の体験談をまとめた各論であり、結論周辺のまとめになってしまっている。この結論を述べたのは被験者CD, CL, CMである。

「現代文明への危険信号」

(A) 母語話者：結論は「現代人が自然に対応しきれなくなっているのは人間存在の危険だ」というものである。これをもとに学習者の結論を分類すると次の2つに分けられる。

(B) 学習者：

(1) 「自然を征服する力のない今の人間は危険だ」○ これは「豊かな生活をしている今の人間は、自然を征服する力がなくなっている。それは非常に危険だ」という内容のものであり、母語話者の結論と一致する。この結論を述べたのは被験者CK, CM, CD, CH, KI, KS, KC, KKである。

(2) 「まとめ解決型」△ これは「昔の人は自然に挑戦し征服してきたが、現代の人達はそういう自然への挑戦する気持ちがなくなって、少しでも寒くなったら震え上がっている。自然にもっと挑戦すべきだ」という内容のものである。これはまとめ部分が「危険である」という現状を指すものではなく、解決策になってしまっている。この結論を述べたのは被験者CL, KPである。

以下に示した表2、表3は、学習者の予測結果を母語別に分け、それに上記の「口頭での結論」の結果を付け加えたものである。又、表内のそれぞれの記号は次のような規則で用いている。

- 展開、内容とも母語話者と類似した予測を行っている。
- △ 展開は母語話者と類似した予測を行っているが、内容が母語話者と違っている
- × 展開、内容とも母語話者と違っている
- 予測を行っていない

表2 「人間が大切な機械化社会」

母語話者の予測	中国人学習者					韓国人学習者				
	CK	CL	CM	CD	CH	KI	KS	KP	KC	KK
予測①車内放送	○	○	○	○	○	—	—	—	—	—
予測②順接型	○	○	○	○	○	—	○	—	○	—
予測③逆接型	△後 続文	X 順接	○	○	○	○	○	○	○	○
予測④逆接型	—	△	○	—	—	—	—	○	—	—
予測⑤結論	X 順接	△内容 不一致	X 逆接	X 逆接	X 逆接	X	X逆接 結論?	○	X 逆接	○
予測⑥結論	—	X 文末	—	X 文末 (逆接)	—	X 同列	—	—	X 順接	X 順接
予測⑦結論	○	—	△	—	△	—	○	—	△	○
口頭での結論	○	X	X	X	△	○	○	○	△	○

まず、表2について考察する。尾括式テキストである「人間が大切な機械化社会」では母語により、予測にかなり違いがあるようである。まず際立っているのは中国人学習者が予測①②③までの段階でかなりきちんと正確に予測を行っているのに対し、韓国人学習者は予測①②ではまだほとんどが予測を行わず、予測は予測③に集中してみられることである。その後、予測⑤でほとんどの学習者が逆接型を予測するに留まっているのだが、既にこの段階で韓国人学習者の2名が結論を正しく予測している。又その後予測⑦でも韓国人学習者3名が正しく結論を予測している。(うち1名は結論を確認している。) それに対し、中国人学習者の中で予測⑦までで結論の予測が正しく行えたものはわずか1名である。又母語話者が結論の予測を行った予測⑦を見てみると、中国人学習者がただ文末を予測しているのに対し、韓国人学習者は結論を予測するまでには至っていないが、文末予測ではなく、結論に近い話の展開を予測している。つまり韓国人学習者は予測⑤以降は「談話の展開に関する予測」を頻繁に行っていると言えるであろう。

以上のように、尾括式のテキストでは学習者間で二つの型が観察された。一つは冒頭部では細かく予測を立てているが、展開が複雑になる予測⑤あたりからテキストの展開に追いつけず、「展開に関する予測」が立てにくくなっているという学習者であり、これは中国人学習者の間で多く見られた。そしてもう一つは冒頭部ではあまり予測を行わず、まず予測③でテキストの展開に注意し、予測⑤あたりから展開を追いながら「展開に関する予測」を頻繁に行っている学習者である。これは韓国人学習者の間で多く見られた。

又、内容理解に関しては、正しく結論を予測できた学習者は理解度も高く、正確な結論を述べているが結論の予測が曖昧な学習者は内容理解にもそれが表されていると言えよう。

表3 「現代文明への危険信号」

母語話者の予測	中国人学習者					韓国人学習者				
	CK	CL	CM	CD	CH	KI	KS	KP	KC	KK
予測①まだ寒い	○	—	—	○	○	○	○	○	○	○
予測②「教訓」 をヒントする	○	X 寒さ	—	○	X 日常	○	—	○	○	—

						生活						
予測③	結論	X 順接	X 軌道 修正	○	X 順接	X 逆接	△内容不 一致	△内容不 一致	—	—	○	
	同列	○	○	○	—	—	○	—	—	—	—	
	↓		結論 △		結論 ○				結論 ○			
	予測④当然だ	—	○	X	—	○	○	○	○	○	○	
	予測⑤当然だ	—	○	—	X	○	○	○	○	○	○	—
	↓		結論 △									結論 ○
	予測⑥同列型	—	X 順接	○	○	— 結論 ○	X順 接結 論修 正○	○	○	○	○	○
	予測⑦順接型	○	△	○	○	○	△	—	○	○	○	○
	↓											
	口頭での結論	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○

次に表3について考察する。両括弧テキストである「現代文明への危険信号」では、母語による予測の違いは尾括弧テキストほど顕著ではないが、予測①や予測④⑤など文末予測に関しては韓国人学習者のが中国人学習者よりも適切に予測を行っていると言える。しかし、予測③における「その後具体例が続く」という「同列型」の予測に関しては、中国人学習者の方が適切に予測をしている。又、「結論」の予測に関しては構成面、内容面とも母語による違いはほとんど見られず、その予測位置は学習者により違っているが、内容面では半数以上の学習者が「文明の発達とは逆に人間は弱くなっている」と予測している。ただし韓国人学習者である被験者KIは前半で行った結論の予測の内容を、テキストの流れを追うことにより後半で修正している。このように既出の情報からの予測については韓国人学習者の方が正確に行っており、展開の関する予測については中国人学習者の方が多少うまく予測が行えると言えるが、結論の内容ではどちらも同じような予測を行っていることから、両括弧テキストでは母語による予測の違いには大差がないと言えるであろう。又内容理解に関しても被験者CL,KP以外は正確に結論が述べられており、予測の段階で母語話者とはやや違った結論を述べていても、口頭での結論は母語話者と一致している学習者もいる。これは冒頭部と結論部の両方に「結論」が提示される両括弧テキストの展開を追っていくことで、後半で予測の修正が可能になるためであると考えられる。しかしながら表3が示す通り、両括弧のテキストにおいても予測を正確に行うことができれば、内容の理解度も高いということが言えるであろう。

以上、母語による予測の違い、及び予測と内容理解との関係について考察してきたが、本調査において中国人学習者は尾括弧テキストよりも両括弧テキストの方が予測、理解ともに容易であることが、又韓国人学習者は尾括弧、両括弧テキストともに予測、理解が容易であることが示された。

6. 結び

これまでの分析をもとに以下に①母語話者による予測、②学習者による予測(母語話者との比較、母語別での比較)についてまとめる。

①母語話者による予測

談話を聞き取る際の母語話者の予測には、(1)直前の既出情報から、後続する情報を予測する。(2)談話の展開に関する予測をする。の二つの段階がある。そしてさらに(2)は(2)-1冒頭部では「キーワード」を手掛かりに話の方向性を予測する。(2)-2展開部では「段落の配列」及び「段落の接続」を手掛かりに話の流れを予測する。という下位構造を成しており、その予測はテキストの構造類型に沿った形で行われ、尾括式テキストでは段階的に、両括式テキストでは冒頭部から展開部にかけて集中して行われる。又、接続表現「しかし」は既出の情報及び段落の配列等から予測可能である。

②学習者による予測

まず、母語話者との比較であるが、談話を聞き取る際の学習者の予測には、母語話者同様、(1)直前の既出情報から、後続する情報を予測する。(2)談話の展開に関する予測をする。の二つの段階があるが、(1)の場合、文の前半から後半への予測は容易だが、前文の内容(反語表現など、文字通りの意味を成さないような表現の場合)から後続文への予測は、困難な場合がある。又、母語話者に観察された(2)の下位構造を成す(2)-2については学習者の場合、テキストの構造類型により違いが見られ、尾括式テキストでは展開に沿って段階的に行う、ことができるが、両括式テキストでは先に提示された結論から「結論」を導くことは難しいようである。一方、内容に関する予測は、逆に尾括式テキストでは「結論」を予測することが難しく、両括式テキストではほぼ正確に「結論」を予測することができる。つまり尾括式テキストでは話の流れを予測することはできるが、展開が複雑なため内容的に捉えることが難しく、両括式テキストでは話の流れを予測することは難しいが、展開が単純であり、かつ結論が繰り返し提示されるため、内容理解は容易であると言えよう。このように、学習者はテキストの構造類型によって、その予測が左右されると考えられる。又、接続表現「しかし」は母語話者同様、既出の情報及び段落の配列等から予測可能である。

次に母語別での比較であるが、尾括式のテキストでは、中国人学習者に冒頭部では細かく予測を立て、展開部で流れが複雑になるとテキストの展開に追いつけないため、「談話の展開に関する予測」が立てにくくなるという傾向が見られる。一方、韓国人学習者には、冒頭部ではあまり予測を行わず、展開部あたりからテキストの展開に注意しながら「談話の展開に関する予測」を頻繁に行うという傾向が見られる。又、内容理解に関しては、正しく結論を予測した学習者は理解度も高く、母語話者と一致した内容の結論を述べているが、結論の予測が曖昧な学習者は内容理解にもそれが表れている。次に、両括式テキストでは、「既出」の情報からの予測に関しては韓国人学習者の方が適切に予測できるという違いはあるものの、「談話の展開に関する予測」は韓国人学習者、中国人学習者とも大差は見られない。又、内容理解に関しては、両括式のテキストにおいても予測を正確に行うことができれば、内容の理解度も高いということが言える。

即ち、中国人学習者は尾括式テキストでは予測が難しく、そのため理解も不十分になってしまうが、両括式テキストでは予測が容易であり、理解も充分であることが¹⁾、又韓国人学習者は尾括式、両括式テキストともに正確に予測を行うことができ、理解度も高いことが示された。

このように今回の調査により、母語話者は談話を聞き取る際、一文レベルから談話レベルまで様々な予測をする中で、特に談話の展開に注意をむけて予測を働かせていることが分かった。一方、学習者は文法面(特に反語表現など文字通りの捉え方をしていたのでは意味がつかめないもの)などにまだ問題を抱えており、それが予測を妨げているため、今後上級レベルの体系的な文法指導がさらに必要とされる。そし

て談話を聞き取る上で最も必要となる談話の展開についての予測であるが、尾括式テキストでは逆接型の展開をする場合、その型の予測は行えるのだが、既出情報が正確に捉えられていないため、展開の方向が定まらず予測内容がずれてしまったり、両括式テキストでは結論の予測位置が母語話者よりも遅かったりする学習者が多く観察された。このような問題を解決するためには、談話の聞き取りで、従来行われていた内容を聞き取らせるという指導の他に、段落ごとやテキストの構成に沿った形での予測を行わせる指導も必要となってくると思われる。又そのような予測能力を養う訓練は上級レベルになってからではなく、もう少し早い段階から行われる必要があるであろう。さらに調査の結果と未習語彙、文章構成に関する知識の有無との関係についてであるが、今回対象となった被験者は、「人間が大切な機械化社会」「現代文明への危険信号」ともに未習語彙はほとんどなく、問題はないものと思われる。又、被験者全員が文章構成に関する知識があり、作文、小論文などでそれらを応用した経験をもっていた。しかし、その知識は「起・承・転・結型」「序論・本論・結論型」という尾括式であり、両括式については有していないようであった。このことから幅広く構造類型に関する指導を行うことにより、学習者の談話を聞き取る際の負担を少しでも軽減することができるのではないかと思われる。最後に、本稿では中国人学習者と韓国人学習者の予測能力の比較を試みたが、それぞれ被験者数が5名と少なく、比較と呼ぶには不十分であった。今後さらにその傾向を探るため、被験者数を増やし研究を続けていくつもりである。そしてそれらの成果をより効果的な上級レベルの聴解指導へとつなげていきたいと考えている。

謝辞：本稿の執筆にあたり、神戸YMCAの日本語教師、スタッフの皆様、関西学院大学の留学生の皆様をはじめ、その他多くの皆様にご協力頂いた。又、大阪外語大学の真嶋潤子先生、鈴木陸先生、関西学院大学の陣内政敬先生に様々なご指導を頂いた。ここに改めて感謝の意を表します。

【註】

- 4 (1) 日本語母語話者10名を対象に予測に関する調査を行い、そのうち複数回答を得たものを予測①～⑦とした。(資料1参照)
- (2) 山本(1995)は「話し言葉(音声言語)」を聴解テキストとしての観点から①音声、②構文、③文体、④達形式の4つを基準に[A]から[H]の8種類に分類できるとしている。本稿では分類の[H]ニュース、ナレーション、学会・研究会等の発表原稿の音読等)にあたる書き言葉の特徴をした話し言葉を研究の対象とし、余剰、フィラーのない聴解材料『ラジオ番組「朝日新聞の声」を聴く』を使用した。
- (3) 日本語能力検定試験は文字・語彙(200点)、文法・読解(200点)、聴解(100点)の3部から構成されており、1級は合計点の70%、つまり280点が合格ラインとされている。本調査では上級学習者を対象としているため、1級試験で280点以上を取得した学習者を被験者とした。
- (4) 市川(1978)は段落を「文章を構成する部分として区分され、それぞれ小主題をもって統一されている文集」と考え、「段落の区分のしかたは絶対的なものではない」と言っているが、ここでの段落の区分は、資料として使用した材料に準じたものである。
- (5) 佐久間(1990)では、「主として接続詞や接続助詞、及びそれに相当する機能を持つ語句(副詞・名詞・連語)や文等を一括して、「接続表現」と呼ぶことにする」としている。
- (6) 市川(1978)では「段落相互の関係は、一つには「連接」の観点、もう一つには「配列」の観点からといえることができる。」とし、「配列」を「内容の性質面から見た配列」と「内容の相互関係から見た配列」の二つに分類している。
- (7) 長野(1983)は、話し言葉と書き言葉の違いとして「話し言葉は話し手は聞き手の反応を確かめながら、話の内容や順序や述べ方を臨機に変更することができるが、書き言葉は、読み手が眼前

にいないため、自分一人で組立を考え、叙述を構成しなければならない。」という点を挙げている。

- 6 (1) 今回の調査に協力してくれた学習者のうち、被験者CSは日本語能力検定試験の点数が259点と合格点である280点に満たなかったため分析の対象からは外したが、その結果を見てみると、尾括式テキストである「人間が大切な機械化社会」は予測がほとんどできず、内容も理解できなかったが、両括式テキストである「現代文明への危機信号」については予測の段階で既に「結論」を予測し、又内容理解も十分であった。

主要参考文献

- 市川 孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 瓜生佳代 (1996) 「談話の展開と予測能力について—確認要求表現を用いた発話を中心に— (1)」『言語文化と日本語教育』12, pp.34-45. お茶の水女子大学日本語言語文化学研究会
- 大野早苗他 (1996) 「予測文法研究—後読文完成課題からみた日本語母語話者と日本語学習者の予測能力について—」『日本語教育』91, pp.73-83
- 国立国語研究所 (1983) 『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育 1』大蔵省印刷局
- 西条美紀・渡邊亜子 (1997) 「日本語ニュースにおける予測方略—日本語母語話者の場合—」『日本語学習者の文の予測能力に関する研究及び読解力・聴解向上のための教材開発』平成8年度文部省科学研究費 補助金基盤研究 (B) (2)研究成果報告書, pp.36-58.
- 佐久間まゆみ (1990) 「接続表現 (1)」『ケーススタディ 日本語の文章・談話』pp.12-23. 桜楓社
- 竹蓋幸生 (1984) 『ヒアリングの行動科学』研究社出版
- 寺村秀夫 (1987) 「聴き取りにおける予測能力と文法的知識」『日本語学』6-3, pp.56-68 明治書院
- 土岐 哲 (1987) 「聞き取り基本練習の範囲」『日本語教育』64, pp. 27-43.
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 平田悦朗 (1994) 「日本語学習者のニュース文末部の聴解について」『お茶の水女子大学人文科学紀要』47, pp. 91-111
- 水田澄子 (1998) 「テキスト構造が聞き取りに与える効果」口頭発表 第3回日本語教育学会平成9年度研究集会 於名古屋YWCA
- 山本富美子 (1995) 「講義、対談等の聴解のメカニズム—テキスト分析を通して—」『日本語教育』86, pp. 13-25.
- 吉田研作 (1990) 「外国語学習とモニター利用」『日本語教育』73, pp. 33 - 43
- ルーメルハート, D.E. (1979) 御領謙訳『新しい認知心理学へのいざない 人間の情報処理』人文社会叢書3 サイエンス社
- Oller, John W. (1979) Language Skill as a Pragmatic Expectancy Grammar. Issue in Language Tests at School, pp. 16 - 35. Longman.
- Oller, John W. (1983) Evidence for a General Language Proficiency Factor: an Expectancy Grammar Issues in Language Testing Research, pp. 3 - 10. Newbury House.
- Omaggio Hadley, Alice. (1993) ACTFL Proficiency Guidelines. Teaching Language in Context Heinle & Heinle Publishers

【資料】

砂川裕一・砂川有里子夫妻共著（1988）『ラジオ番組の声』を聴く』くろしお出版

【資料 1】

【第2課 人間が大切な機械化社会】

(1) 先日、東京行きの新幹線の車内で「私ごとで恐縮ですが…」という車内放送がありました。(2) 何事か、と思って耳をそばだてていましたら(予測1)「毎日のように列車に常務しているのですが、今日ほど富士山がすばらしく美しい日はめったにございません。今進行方向左手に見えております。どうぞ存分に御鑑賞ください」というのでした。(予測2)(3) 前の日からの寒波襲来で、頂から7号目あたりまですっぽりと雪化粧した富士山です。(4) その時私は、ヒマラヤ登山隊の様子を描いた小説を読んでいる最中でした。(5) 酸素の足りない空気や、大規模な雪崩との苦闘を重ねながら、山頂に迫る姿を克明に捉えた作品です。(6) 雪に包まれた高い山の魅力にとりつかれた男達の物語です。(7) そのせいか、車内放送に教えられて見つめた富士山は、ことのほか美しく見えました。(8) 人によっては、このような車内放送も余計なお節介に、聞こえるかもしれません。(予測3) あまりくどかったり、押しつけがましかったりしたら、そう感じる人も増えるでしょう。(予測4)(9) でも、この時の車内放送は年季の入った専務社掌さんの声らしくて、一人でも多くの乗客とともに見事な富士山を眺めたい、という気持ちがかもっていました。(10) 新幹線にしても、ジェット機にしてもほとんど人手に頼らず、機械装置だけで、運行できるようになってきています。(予測5)(11) バスの案内放送でも録音テープに吹き込んだのが、(予測6)自動的に流れる仕組みになっています。(予測7)(12) でも、時としてパイロットや、運転士さんや、車掌さんの生の声が流れるとなんだかほっとさせられます。(13) 機械化が進めば進むほど、生身の人間の果たす役割が大切になっている、とはいえないでしょうか。(14) 公私混同はよくないことですが、だからといって定められた通りの車内放送しかなかったとしたら、乗客もせっかくの景色も見過ごしてしまうことになるでしょう。(15) 「私事で恐縮」始まった、車内放送のおかげで、終点に着くまで、晴れ晴れとした気分になることができました。

【第10課 現代文明への危険信号】

(1) 節分が過ぎ、今日はいよいよ立春です。しかし、暦の上では春だというのに、(予測1)雪が降り、氷が張り、今年はい例年になく厳しい寒さが続き、春は遠いようです。(2) 寒さよけの生活に慣れきってしまった私達には、今年の寒さは、一段と堪えたのではないのでしょうか。(3) その寒さというのも、よく考えてみますと、私達の日常生活のあり方について、一つの教訓を与えているように思われます。(予測2) 大げさに言えば、現代文明に対する警告であり、危険信号が出されているとも言えそうです。(4) かつて人間は、自然の厳しさに耐え、それに挑戦し、自然を征服して、現代の文明を築き上げてきたわけですが、暖房の設備が完備し、防寒用の衣類が普及し、さらに、乗り物の発達や地下道の建設などによって、その自然の厳しさを忘れてしまい、極めて日常的な自然現象にも、うろたえ、悲鳴を上げ、驚きの声を上げているような姿が、あちこちに目立ちます。(予測3)(5) 人々は、ちよつと雪が降ると滑って転び、中には負傷するというケースもあって、自然の中を、まともに歩くことさえもできなくなっています。(6) 少し雪が降ると交通機関のダイヤは乱れ、多くの人々が、寒さの中で震え上がっているという姿を生んでいます。わずか20センチ程度の雪が降っても「食料品の買い入れができない」とか、「雪のために、生鮮食料品の入荷がない」と悲鳴を上げ、生活のリズムを狂わせて困っている人もあります。(7) 冬に雪が降り、氷が張るということは、(予測4)これは当然過ぎるほど当然なことです。そのことを計算に入れて生きるということも、(予測5)これも又当然のことですが、人間は自然に適応して生きるということを忘れつつある、というよりも、自然に対して挑戦する意欲を失い、自然の脅威にさらされているといっても、いいのかもしれませんが。(8) ビルの暖房がスドップしてしまい、暖房用の石油やガスや電気が不足するような事態が起こったときは、果たして人間は、自然の厳しさに打ち勝って平然と生きていける自信が、あるのでしょうか。(予測6)(9) 豊かさや便利さになれてしまった私達は、もしも、社会事情の思わぬ急な変動や、自然現象の異変にぶつかった場合、(予測7)たちまちパニック状態に陥まされることになるでしょう。(10) 自然に適応し、挑戦する意欲を失ったなら、それは人類の危機と言わなければなりません。雪や厳しい寒さは、現代文明に対する一つの危険信号でもあるのです。